
桜花

小林 晶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花

【Zマーク】

Z2897E

【作者名】

小林 晶子

【あらすじ】

進路に行きづまつて帰ってきた故郷。あんなに嫌っていたこの町で出会った少女は…。

第一話

僕が十八まで住んでいた町は、山と川と畠ばかりの小さくて寂れたところだった。田舎特有の人間関係も地域性の高さも、僕には鬱陶しいばかりで、体面だけを取り繕うことを見ると尚のことだった。

高校卒業後、逃げるように県外の大学に進学した僕は、盆や正月になつても何だかんだと理由をつけて帰省を避けていた。両親も何となく察しているのだろうが、何も言わないところを見ると、向こうもそんな息子とは顔を合わせ辛いのだな。

まっすぐ家には帰らないで辺りをうろついていると、いつの間にか神社の境内に来ていた。

古ぼけた社に草の登つた鳥居。三年も経つところに、この町はどこも変わっていない。それが余計に自分を拒んでいるように思えて居心地が悪かった。

「あなたも桜、見に来たの？」

「…桜…？」

自分の他に誰かいたことに驚くよりも、違和感を覚えたその言葉を反芻していた。

「桜なんて」

暦の上では春といつても三月中旬で、まだ寒い日が続いている。梅ならともかく桜が咲いているわけがない。

「ここ」の桜は早咲きだから。今はまだだけど、すぐ満開になるよ。ほら、つぼみ見えない？」
(せうだっけ?)

三年前の今頃は、花なんて咲いていただろうか。

花どころかわずかな緑さえ芽吹いていないように見える大木を仰いだ僕は、そのとき初めて声の方を振り返った。

健康的な白い肌は、年頃の女の子にしては化粧つ氣がない。少し

傷んだ茶髪を首の位置で揃えて、トレーナーにジーパンといづらつな格好をしている。

「見かけない顔だけど。…この辺の人だよね」

「……」

「東京？」

「……」

「…喋れないわけじゃないよね?」

覗き込むようにして僕の顔を見ていた彼女は、思いっきり僕の頬を引っ張った。

「そんなわけないだろ」「

僕は顔をしかめて、その手を払いのけた。初対面で馴れ馴れしきるとは思わないのだろうか。

「そうだね、ごめん」

彼女は意外にも、あっさりと謝った。

「つい、いつもの癖で」

…この感じは駄目だ。

初対面のはずなのに、何故か苛立つ。彼女は僕にないものを全て持っている。僕が嫌悪して、意識的に避け続けていたものを持っている。そんな気がした。

僕は彼女に背を向けて、短い階段を下りた。

「あ。ねえ、名前」

関係ない。

「なんていう名前なの?」「
無い。

「名前、ないの?」

「そんなわけないだろ」

どうして放つておいてくれないんだろう。どうして他人のことを知りたいと思うんだろう。理解できない。

「言いたくないんだ。じゃあヒロコキツて呼ぶよ」

「?」

「私が最初に付き合つた人の名前
最低な気分だ。

自分とは決して相容れない存在。

もうそれ以上そこには居たくないって、僕は早足で神社をあとにした。

いつもならあんな言い方はしない。もつと賢くかわすことができたのに、久しぶりに帰つてきたせいで調子が狂つていいのかもしない。

そうだ。あの感じ、覚えがあると思ったら、この町の雰囲気そのままなんだ。誰のことも他人とは思わない、みんなが家族みたいな空気。僕はそういうのが嫌で、この町を出て行つたんだ。

「あ、兄ちゃん」

家の前の道端で遊んでいた弟が、目敏く僕を見つけて駆け寄つて来た。僕とは正反対で、人懐っこい性格をしている。歳の離れた弟を可愛く思わないわけではないが、弟が生まれてから余計に家に居辛くなつたのも事実だつた。

「お母さん！」

そう叫んで、僕の手をひいて家へ入る。

「どうしたの、貴志。そんな大声出して」

貴志の声を聞きつけて玄関先に出てきた母親は、僕の顔を見て目を丸くした。

「…おかえりなさい

「ただいま」

「帰つてくるなら電話くらいしてくれれば良かつたのに…」

僕がいきなり帰つてきて困つてているのが、手に取るよに分かる。予想通りの反応に、かえつていつものペースが戻つてきたらしい。僕は笑顔さえ浮かべて、母親の横を通り過ぎた。

「ねえ兄ちゃん、いつまでいひこひらがれるの?」「いつまでって」

そう長居するつもりはないが、特に急ぐ用事を残してきたわけでもない。卒業後の進路のことをほんやりと考えていて、気がついたら帰省していたのだ。

そんなつもりはなかつたのに。

「お祭りがあるの、知つてるでしょ」

「ああ、毎年神社でやつてんやつだろ」

「一緒に行こひうよ」

とんでもない。あんな知り合いばかりの祭りに行くなんて、冗談じゃない。

「暇だつたらな」

「僕、みんなに兄ちゃんのこと血運するんだ」

すっかりその気になつてゐる貴志には悪いが、何か理由をつけて早めに帰つたほうが良さそうだ。

きれいに片付いたまま二年前と変わらない自分の部屋に鞄を置くと、母親に言われて何故か貴志の絵の宿題を手伝つてやることになつた。僕が貴志に構つていれば、親も少しは安心できるとこうわけだ。

茶の間の机に広げられた四つ切りの画用紙を覗き込むと、貴志は緑の水彩絵の具でべつたりと森を塗り潰していくところだった。

「…?」

見れば森の他には川と空しかない。まるで。

「写生?」

まるでこの町みたいだ。それにしても短絡化しそぎているが。

「うん。昨日あの神社で下書きしてきたんだ」

神社といえば妙なことを思い出してしまつた。あの子は何だつたんだろう。少なくともここで生まれ育つたわけではないことは確かだ。雰囲気はこの町に馴染んでいたが、きっと都会育ちだろつ。こんな辺鄙なところでは珍しいことだ。

「あーあ、失敗。何で上手くいかないのかな」「どこが失敗なんだ？」

確かにお世辞にもきれいとは言えないが、小学生の絵なんてこんなものだろう。木に影があるだけでも上出来と言える。貴志は口をへの字に曲げて、画用紙をびりびりと破いた。

「これじゃ駄目なの」

そう言つてわざと絵の具を片付けてしまつた。

次の日、僕は写生の下書きをやり直すという貴志に連れられて、もう一度あの神社に行つた。今度はそこで色も塗つてしまつつもりなのか、絵の具も持つてきている。

僕は隣で大まかな間違いだけ指摘していたが、塗る段階になると貴志は少し手をつけるだけで、あとは全部僕が塗るめになつた。「すごい。兄ちゃんつてやっぱり何でも出来るんだ」

美術の成績は悪くなかったが、絵を描くのが特別好きだったというわけでもない。得意なものがあつたわけでもない。ただ人並みに劣っているものがないだけで、周りが勝手に何でも出来ると思い込んだだけだ。すごくも何ともない。努力したからそうなつただけだ。

「貴志、でもこれ」

「あーっ、おねえちゃん」

僕の言葉を遮つて、貴志が神社の境内を駆け下りていく。

「…？」

嫌な予感がして恐々と見下ろすと、案の定、そこには昨日のあの女の子がこちらを見上げて立つていた。貴志が絵を見せて僕の方を指差す。田が呟うと驚いたような顔をしたが、すぐに貴志と共に階段を上つて近づいてきた。

「こんにちは」

「はじめまして」

貴志がいるてまえ、昨日のよつた態度を取ることもできず、仕方なく笑顔をつくつて挨拶をする。言葉が不自然なのに気付いて彼女は少し首を傾げたが、何も言わずに受け流してくれた。

「貴志くんのお兄さんなの？かつこいいね」

「うん！」

「お兄さん、何でいう名前なの？」

意地悪つぽく僕のほうを横目で見ながら、貴志に尋ねる。

「佐藤裕幸」

「…ひろゆき！？」

啞然として、それから笑いを堪えるようにその場に蹲つた。あんなことを言われた後だから、これだけは絶対に知られたくないと思っていたのに。

「貴志、もうすぐ日が暮れるから先に家に帰つてろ。母さんが心配する」

言つて先に帰らせると、まだ肩を震わせている彼女を軽く睨みつける。貴志が見えなくなると、今度は大声で笑いはじめた。

「ほんとにひろゆきだつたんだ」

笑いすぎて、目の端に涙を浮かべてすらいる。

「しかも貴志くんちのお兄ちゃんだつたとはねー。ほんと、噂通り。成績優秀でスポーツ万能で、人当たりが良くて頼りになつて、おまけに誰にでも優しい」

「…そんな人間がこの世にいるわけないだろ」

「みたいね」

笑いが一段落ついたのか、指で目の端を拭つと、階段に直に腰を下ろした。

「私の名前、訊かないんだ」

「だから？」

何か変なものでも見るような目で僕を見上げる。

「変でしょ。あなた、私のことなんて呼ぶつもりなの？」

また会う機会があるとは限らない。いや、むしろもう会いたくな

い。

僕は少し考えて、適当にかわして帰るまで会わないように気をつけたいといふ。

「ナオ！」

「…最初の彼女の名前？」

「母親」

あの人があんな名前だったなんて、今まで気付かなかつた。十代で僕を産んだという母親は、二十歳の息子がいるとは思えないくらい若く見える。

「お母さん好きなの？」

「まさか」

今さら彼女に優等生ぶつても仕方がない。

「他に思いつかなかつたから」

「付き合つてた女の名前なんて覚えてないって感じだもんね。あんまり女の子…ってゆうか他人に興味がないんだ」

そう言われてみればそつかもしない。勉強して大学に行つて、この町を出ることしか考えていなかつたような気がする。

「でも私にはちゃんと中野千晴つて名前がある」

「…ふーん」

ナカノチハル。やつぱり聞いたことない名前だ。

千晴は田の沈みかけた町を見下ろして、田を細めた。

「良いとこだよね、ここ」

「…」

「町の人とはみんな優しいし、自然もいっぱいだし。お祖母ちゃんと二人暮しなのに、なんか一度に家族ができたみたいでさ。私ずっとこういうのに憧れてたんだ」

「…」

「…何で嫌いなふりするの」

千晴は立ち上がり、僕をじっと見据えた。こういう真っ直ぐな人間は苦手だ。…自分がそうでないからだろうか。

「せつときはそんなじやなかつたのに

「せつあ？」

「絵、描いてるとき。そんな顔してなかつた」

見られていたなんて気付かなかつた。僕は千晴と田を合わせないよつにして一段低いところに降りた。

「こじが良いとこだつて言つたよな

「？言つたけど

そんなふうに思つたことは一度だつてない。

「君にとつてはもの珍しくて良い所かもしれないけど、僕は……」

きつと誰にも分からぬ。分かつてもらう必要なんかない。

第一話

『どうして私だけ！？』

誰だらつ。

『私だつてやりたい』ことがあるのに、どうして家に縛られなきゃいけないの』

ああ、これは母さんだ。僕がまだずっと子供だつたころ、よくそう言つて泣いていた。かわいそうなひと。

『まだこんなに若いのに、どうして…。子育てで一生終わるなんて嫌よ！』

（じゃあどうして僕を産んだ？）

僕がちゃんとしていれば、僕が母さんを困らせたりしなければ、母さんだつて好きなことができる。そう思つていたのに。

『おまえは将来、この家を継ぐんだ』

（なぜ？）

だつてそれは父さんの仕事じゃないか。父さんのやりたいことを、どうして僕がしなきゃいけないんだ。

（僕にもつと、やりたいことが…）

『成績優秀でスポーツ万能で、人当たりがよくて頼りになつて当たり前だ。そうなるように努力したんだから。そんなふうに自分をつくってきたんだから。

『兄ちゃんつてやつぱり何でも出来るんだ』

でも本当は、何も出来ない。

『おまけに誰にでも優しい』

嘘だ。僕はこんな町、嫌いだつた。鬱陶しい人間も嫌いだつた。家に固執する父親も泣いてばかりの弱い母親も大嫌いだつた。

『…何で嫌いなふりするの』

嫌いだから、逃げ出したんだ。

「裕幸、もう寝てるの？」

母親の声が僕を呼んだのは、時計の針はまだ十時を少し回ったくらいで、特にやることもなかつたから横になつてはいたが眠つてしまなかつた。自分の家にいるのに何故か落ち着かないところは、三年前と少しも変わっていない。

「起きてるよ」

僕は起き上がりつてそう答える。僕は昔から勝手に部屋に入つても怒つたりしなかつたが、いつからか向こうの方がそれを避けるようになつていた。それが今日は珍しく、母親は中の様子を窺うよう部屋のドアを開けた。

「何？」

「裕幸、何か困つてることがあるの？」

「？」

何の話をしているんだろう。よく理解できないで、僕は首を傾げた。

「だつて、急に帰つてくるから、何かあつたんじゃないかなつて」

（ああ、そういうことか）

普通は自分の息子が家に帰つてきたからつて、どうして帰つてきたんだとか訊かないだろう。どうしようもなく笑える親子だ、僕達は。

「別に、何もないよ」

「本当に？」

「大丈夫だつて。母さんが心配するようなことは何もないんだから」

いつものよじり言つと、母親は何故かしゅんとなつてしまつた。

「そうよね。裕幸は母さんなんかいなくたつて大丈夫だもんね」

今度は何を言い出すのかと思つたら、何を突然。

「裕幸は昔から勉強も運動もできて、この近所であなたの」と褒めら

れるのがすごく嬉しかった。でも母さん、裕幸に何にもしてあげないよね。だから裕幸に嫌われても仕方ないって思つてたの」

「……そんなことないよ」

「分かるわよ。だつてあなたの親だもの」

「僕は急に腹が立つてきた。今更、母親みたいな顔をされても困る。僕なんか産まなければ良かつたつて思つてるくせに。」

「僕は」

だから僕は一人で何だつてできるようにならなきやいけなかつた。いつだつて母さんを自由にしてあげられるよつに、誰にも頼らないようになら。

「本当に大丈夫だから……」

完璧な人間になりたかつた。そうすれば誰にも何も言われない。

干渉されない。

「……そう」

部屋を出て行く母親の背中を見送りながら、僕はふと千晴のこと

を思い出していた。

その日は朝から雨で、別にすることもなく部屋でぼんやりしてい

た僕は、水溜りの水をはねる音に気を取られて、何気なく窓の外を見やつた。家の前を誰かが横切つていく。ただそれだけのことが妙に目を引いたのは、彼女が傘も差さずにふらふらと歩いていたからだつた。

（何やつてんだ、あいつ）

知り合いでないなら呆れるだけでやり過げただろうが、放つておくわけにもいかない。もし肺炎でも起つされたら、後味が悪いし。

「……」

声をかけようとしたが、急にいつもと違う雰囲気を感じて、我に返つたとき、僕は千晴の姿を見送つてしまつていた。

(神社か?)

方向がそうだったし、それに千晴の行きそつなどころなんて、僕にはそれくらいしか思い浮かばない。僕はどうしようか迷ったが、結局、神社に行つてみることにした。

家からはそう遠くないのだが、山の中だけに曲がり道やら坂道やらが多い。いつ見ても古いだけで胡散臭いこの神社のあの桜の大木の下に、千晴は俯いて座つていた。僕の姿を認めて笑つたのが、あまりにもいつも通りで、僕はどうしていいかわからなかつた。

「馬鹿かおまえは。傘ぐらい差して歩けないのか」

一応、千晴が濡れないくらいの位置まで近づく。彼女は、それには答えなかつた。

「やつぱり桜、見に来たんだ」

「…」こんな雨で、咲くわけない

僕の中で、また苛立ちが頭を擡げてくる。それは以前と違つた、理屈では説明できないもつと根本的なものだつた。

「何があつたのか」

「でも明日が明後日くらいには咲きそつなんだよ?」

「そんなこと訊いてるんじゃない」

「…」

「…」

これじゃ、最初に会つたときと立場が逆だ。僕は諦めて向こうが

口を開くのを待つことにした。

「ほんとに何でもないことだよ。…親が離婚するだけ」

(親?)

確かにお祖母さんと一人暮らしだと聞いていたはずなのに。察したのか、千晴はまた笑つて、言つた。

「どつちも本当。両親はいるけど、私は一年前からお祖母ちゃんと二人暮らし。でもそのお祖母ちゃんも、この前ぼつくり逝つちゃつた」どうして一人暮らしすることになつたのかは、聞かなくても何となく察しがつく。

「もう一人でも大丈夫なのに、親はそうじゃないみたい。どっちが私を引き取るかで裁判までして。…笑っちゃうよね。親が子供を譲り合うなんて」

譲り合う。

それは、つまり。

「いらないならいらないって、はつきり言つてくれればいいのに」

「……」

「…ハハ…冗談じゃないよね。いつもいつも子供だからって親に振り回されて。産んでやつたから育ててやつたからって、それが何？」
こんなときでも千晴はやっぱり笑っていた。その表情から悲しいという感情を読み取ることはできない。

「私なんて生まれてこなければ良かつたって思つてるくせに…」

『僕なんか産まなければ良かつたと思つてるくせに』

僕はまるで何か変なものでも見るような目で、彼女を見つめていた。どうして、僕と同じことを言つんだら？。僕と彼女は全然、正反対の人間だったはずなのに。

「…私、お父さんのこととお母さんのことも好きだった」

ぽつりと千晴がそう零した。

「良い子でいれば私のこと好きになつてくれるつて思つたのに、良い子だから放つたらかし。今度は髪染めたり学校サボつたりしても叱りもしない。…だから諦めた。もう期待しないように、嫌いにならうつて」

『一人で何だつてできるよつて』

『完璧な人間に』。

ずっと、そう思つていた。

「でもこの町にいれば、ずっと欲しかったものがこんなに簡単に手に入るんだよ。ここには私の居場所がある。ここにいればもうあんな思いしなくてすむ」

立ち上がった千晴は服が汚れるのも気にしないで、木の幹に寄り掛かる。

「明日、咲けばいいんだけど」
僕にはその言葉の真意が分からなかつた。

『お父さんのこと、お母さんのこと、好きだった』。

家に帰った後も、千晴の言葉が耳について離れなかつた。

そうだ。僕も昔はそんな気持ちを持っていたような気がする。父親に認めてもらいたくて、母親に好かれてくて、ただそれだけのために努力して、今の自分をつくってきたのだ。どんなに頑張つても、僕は親にとつての子供でしかないのに。

僕が何でもできるようになればなるほど、親は僕の存在を持て余すようになった。そして僕自身も。

「兄ちゃん」

我に返つた僕は、いつの間にか貴志が部屋に入つてきていたことに気が付いた。

「ご飯だつて」

「あ、ああ。今行く」

他人のことなんか分からぬ。僕だつて僕が何なのか分からぬでいるんだから。何ができるのか何をしたいのか、そもそも自分が居るべき場所さえも。

「あ、兄ちゃん」

一足先に階段を下りていた貴志が、急に思い出したようにぐるぐると振り返る。

「明後日のお祭り、一緒に行けるよね

「祭り?」

そういえば祭りのことなんかすっかり忘れていた。

「どうかな。雨が止まなかつたら祭りはできないから」

僕にとつては、その方が好都合なのだが。

「えーっ、そんなのやだー」

「やだつて言われても」

僕にはどうしようもない。貴志の大声が台所の母親にも聞こえた

のか、皿を並べながら軽く貴志を叱った。

「わがまま言わないの。お兄ちゃん、困ってるでしょ。それにお祭りなら来年もあるでしょ？」

「だつて兄ちゃん、あんまり帰つて来ないんだもん」

何気に痛いところを突かれたような気がする。子供だから他意はないのだろうが、両親の前で、こうもはつきりと指摘されるとは思つていなかつた。

何となく居心地の悪さを感じながら椅子に座つた僕に、それまで新聞で顔を隠すようになっていた父親が珍しく口を開いた。

「…東京はどうだ」

三文ホームドリマかとツツ「ミミたくなるような言葉に、僕は思わず吹き出しそうになる。寸でのところで笑いは避けたが、それでもいつもとは違う笑顔になつてしまつた。

「いいところだよ。便利だし」

「…大学は？」

「ちゃんと勉強してるよ」

「そうか。…卒業したらどうするんだ」

「僕は…」

卒業したら。

そう明確に示されて、僕は言葉に詰まつた。

自分にはもつとやりたいことがある。漠然と、そう思つていた。でも家を出て、町を出てもその答えは見つからなかつた。

ただ、ここから逃げ出したい。

それを目的にしていた僕には、その先のことなど具体的に考えられるはずもなかつたのだ。

「まだ、決めてない」

口からでまかせを言うわけにもいかず、正直に言つ。

「…うちに帰つてくるかも、分からぬし…」

「ええー…！」

貴志が驚いたように叫んだ。

「やうか。まあ、おまえはしっかりしてるとか。自分がやりたいと思うことをしなさい」

こつものようごどうせ家がどうの会社がどうのとこつ話になるだろうと思つていた僕は、思いがけない台詞に面食らつてしまつた。父さんはそれ以上なにも言わなかつたが、母さんのように僕がどうして帰つてきたのかと思つてゐるだろう。一緒に暮らしてゐる頃は、父の跡を継ぐと名言したことはなかつたが、表立つてそれを否定することや反発することはしなかつた。僕には、それがよけいな煩わしさを生むよう思えたから曖昧にしていたのだ。父親に認めてもらいたい、母親に嫌われたくない、そんな気持ちが中途半端な今の状況を生んでいるのだろうか。

やりたいことをしなさいと言つた父の言葉に抵抗はなかつた。しつかりしてゐるから、という両親の言葉は、放任なのではなく信頼してくれてゐるのだと今は素直に受け取ることができた。

次の日は、昨日までの雨が嘘のように晴天だつた。貴志はすつかり僕と祭りに行く氣でいるが、地面が乾いてないせいか、神社に祭りの準備をしてゐる様子はない。ついて行くと言つて聞かなかつた貴志を、何とか説得して來たが、境内にも桜の下にも彼女はいなかつた。別に会う約束をしていたわけではなかつたが、昨日聞いたあの言葉が気になつて、ここに来ずにはいられなかつたのだ。変な話だが、ここまで來ていながら僕は、千晴がもうここには来ないような気がしてゐた。

桜の枝先のつぼみは、もう自然に日にづくらになつてゐる。千晴は明日と言つていたが、今日中には無理だろう。

いいかげんバカバカしくなつて帰ろうと踵を返した僕は、境内に立つてこつちを見つける彼女を見つけた。

「なんだ。やっぱり桜、見に来てたんじやない

「…別に」

「じゃあ、見送りに来てくれたの？」

「…？」

僕には何のことだか分からなかつた。

「言つたでしょ。私、どつちかの娘になるんだつて見れば、服はいつもとあまり変わらないが、荷物の一部らしい大きな鞄が鳥居の側に転がつている。

「花、やつぱり咲かなかつたね」

千晴は湿つた木の肌に手を当てて、笑つた。

「残念。今日咲いてたら、東京まで持つていこうと思つてたのに。やつぱりこの木はここにあるのがいちばんなんだよね。…私も」「こんなときになつても、千晴の笑顔には曇りがない。僕にはそれが余計に腹立たしい」とのようと思えた。

千晴は名残惜しそうに木から手を離すと、自分の鞄を持ち上げる。

「…」

「私、絶対ここに帰つてくるつて決めたから、花はその時までおあづけ。もう一回、この桜見るまで頑張つてみる」

「…そうか」

引き止めよつとは思わなかつた。そつする理由も見つからなかつたし、そんな必要もなかつた。

「…ねえ」

僕に背中を向けて、思い出したよつて尋ねる。

「どうして今日、ここに来たの？」

「…風邪、ひいてないかと思つたから」

嘘でもない。あれだけずぶ濡れになつていれば、風邪の心配をして当然だ。

「でも損した。ナントカは風邪ひかないつていうし」

「何それ、最悪。…もつと気の利いたこと言えないの？」

「頑張れよ」

「…裕幸もね」

それだけ言つと、千晴は古くて薄汚れた階段を降りていく。

今、この瞬間に咲くかもしれない桜を、振り返りもしなかつた。

「兄ちゃん」

逸れないよつて手を繋いで歩いていた貴志が、人雑の中で僕を呼んだ。

思い出した。三年前もこつやつて貴志と一緒に祭りに来ていたような気がする。季節外れの桜を見上げていたような気がする。

「やっぱり僕、あの絵、持つていけない」

あの絵というのが、半分以上を僕が手伝ったあの「生の絵だとうことはすぐに分かつた。そして僕も、同じことを貴志に言つてしまひでいた。

「僕、兄ちゃんの弟だから、兄ちゃんみたいに何でもできるようになるんだって。僕は兄ちゃんと違つてお父さんやお母さんに怒られてばかりだし、兄ちゃんみたいになつたら、みんな喜んでくれると思つて…」

貴志がそんなふうに思つていたなんて、知らなかつた。ずっと弟は僕より恵まれていて、少なくともあの家にとつて自分より意味のある存在なんだと思っていた。

自分は自分だと思つていても、他人はそうは思つてくれない。僕の弟というだけで、無条件に何もかも比較される。それが貴志にとつては辛いことだったのだ。

「でもやっぱり、そういうの嫌だから、自分で描くよ。…『めんなさい』

「謝ることなこつれ。自分でやらないからなこひ」

「つよ」

貴志は満面の笑顔で頷いた。

僕はふと彼女を思い出して、すりつと並んだ屋台の向い側を仰

ぎ見る。少し早い桜が、花火にも劣らないくらいきれいな花を咲かせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2897e/>

桜花

2010年10月8日15時31分発行